SYÔNEN SYÔZYO

Sekai Bungaku Zensyû

三国志　羅貫中

水滸伝　施耐庵

聊斎志異　蒲松齢

ほか1編

少年少女
世界文学全集

日本編(3)

八犬伝

滝沢馬琴作・豊田三郎訳

東海道中膝栗毛

十返舎一九作・麻生磯次訳

雨月物語

上田秋成作・村松定孝訳

ほか3編

講談社

少年少女世界文学全集47
日本編　第3巻

著者の了
解により
検印廃止

N. D. C. 913
講談社　昭和35
422P　23cm

昭和35年10月20日発行
訳者代表　麻生磯次
発行者　野間省一
印刷者　高橋武夫

発行所　東京都文京区音羽町3ノ19　株式会社　講談社
振替口座東京　3930　電話大塚（941）大代表　3111

印刷　大日本印刷
製本　大進堂
本文用紙　本州製紙
背皮　株式会社石井
クロス　日本クロス

定価　380円

© 麻生磯次　昭和35年
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

PRINTED IN JAPAN

目　　次

少年少女 世界文学全集
第 47 巻
日本編第 3 巻

八犬伝

滝沢馬琴作
豊田三郎訳

伏姫の巻
夜なきするひめぎみ……11
猛犬八房……17
とびちる八つの玉……23
村雨丸の巻
おにの夫婦……28
義兄弟のちかい……33
水中のあらそい……37
浜路……44
決闘、芳流閣……54
大力の巻
すもうのうらみ……57
身がわりの首……64

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

刑場あらしの巻
あやうし、荘助……69
なかなおり……74
ばけねこ退治の巻
名笛「あらし山」……82
庚申山のばけもの……90
かたきうちの巻
にせ奉行……97
山賊退治……102
七犬士……108
妖術の巻
怪童……112
ふるだぬき……117
合戦の巻
八犬士の入城……122

大軍せまる……125
大団円……131
東海道中膝栗毛……十返舎一九作 麻生磯次訳……133
旅だち……135
五右衛門ぶろ……137
ごまのはい……143
ひもじい旅……148
とろろじる……153
大井川の川ごし……156
座頭の酒……160
ゆうれいの宿……165
へび使い……169
赤坂ぎつね……173
へぼしょうぎ……178

だんなとけらい……185
にせものの一九……190
大きな白いゆうれい……198
柱のぬけあな……202
はしごのにもつ……208
富くじ……214
雨月物語……上田秋成作 村松定孝訳……221
きくの日のやくそく……223
真間の夜話……237
こいになった僧の話……244
ぶっぽうそう……251
吉備津のかま……260
大蛇のいたずら……274
青ずきん……299

西鶴名作集……井原西鶴作　暉峻康隆訳……309

小判十二両……311
ふしぎのあし音……314
のこるものは金のなべ……316
かみなりの病気……319
のみのかごぬけ……320
身ぶるいは三十七度……323
ゆめに京よりもどる……324
力なしの大仏……325
むねのおどるこの盆前……327
ぼうさんと大どろぼう……329
見てかえる地獄極楽……334
身から出たさび……337
たいこの中を知らぬが不運……339

大事をききだす琵琶の音……343
国姓爺合戦……近松門左衛門作　青江舜二郎訳……347
1 花いくさ……349
2 もろこしぶね……358
3 千里が竹……362
4 獅子が城のべに流し……367
5 今牛若……377
6 九仙山……379
7 南京城かんらく……384
芭蕉、蕪村、一茶名句集……中村草田男訳……391
解説……福田清人　麻生磯次　村松定孝　暉峻康隆　青江舜二郎　中村草田男……406

読書指導……読書指導研究会 滑川道夫 亀村五郎……417

装本　池田仙三郎
さしえ　山崎百々雄
清水崑
鴨下晁湖
永井潔
福田貂太郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

八犬伝

滝沢馬琴作
豊田三郎訳

八犬伝について

「八犬伝」（原題・南総里見八犬伝）は、江戸時代の文学者、滝沢馬琴が、28年もかかって書きあげた大作です。

たいへん雄大で、興味ふかいものがたりなので、ひろく、おとなからも子どもからも愛読されました。

そのあらましは、里見義実のむすめ伏姫が、八房といういぬと山でくらし、やがて、ひめは死にます。そのとき、ひめの持っていたじゅずから、八つの玉が空中にとびちって、仁、義、礼、知、忠、信、孝、悌の八つの徳をあらわす８人の勇士となります。

この８勇士は、おのおのいろいろな運命をせおって、めぐりあい、義兄弟のやくそくをして、おたがいに力をあわせ、わるものたちとたたかいます。そして、里見家につかえては敵をうち、さいごには仙人となるというお話です。

作者は、その生きた時代の理想の道徳を、この８人の勇士にこめて、書きあげたのでありました。

（福田清人）

さしえ・山崎百々雄

伏姫の巻

夜なきするひめぎみ

室町時代の中ごろ、安房の国（千葉県）滝田に、里見義実というわかい城主がいました。この人は武勇のすぐれた、つよい大将でしたが、たいそうやさしい心のもちぬしで、けらいや、領内の百姓たちをかわいがりましたので、みんなから、したわれていました。

嘉吉二年の夏のある日、義実のおくがた、五十子が、はじめてあかちゃんをうみました。

「夏のあつい日にうまれたから、伏姫という名をつけよう。むかしから夏のことを三伏の候というからね。」

「ずいぶん、へんな名まえですこと。でも、めずらしくて、いいと思いますわ。」

あかちゃんの名まえは、伏姫とよぶことにしました。

伏姫は、日ましにかわいく、美しくなりました。たけ取りのおじいさんが、たけの中に見つけたという、かぐや姫だって、こんなに美しくはなかったろう。うばや侍女たちは、まじめにそう考えました。

ところで、伏姫がそだつにつれて、義実とおくがたは、しんぱいしだしました。なるほど、ひめは美しいにちがいありません。わが子がどうしてこんなに美しく、けだかいのかと、顔をのぞくたび、ふしぎでならないくらいなのです。しかし、伏姫は、もう三つになるというのに、口もききませんし、わらいもしません。そればかりか、夜なきをして、よくねむらないので、だんだんやせて、いまにもきえてなくなりそうでした。

おくがたの五十子は、とうとうがまんができなくなって、

「いったい伏姫は、どうしたというのでしょう。まいばん、火がついたようになって、むずかってばかりいます。わたしは、しんぱいで、しんぱいで。」

もうなみだぐんで、義実にうったえました。

「ひめは、美しくうまれすぎて、そだたないのかもしれない。伏姫は、人形のように、口もきかず、わらいもしない。

かわいそうなひめ。いっそ、うまれなければよかった。」
義実は、くるしそうにいって、ため息をつきました。
医者よ、くすりよ、とさわいでも、伏姫の夜なきがやまないので、夫婦は、もうどうしようもなく、かなしみにしずんでいました。
ある夜、伏姫は、とうとうひきつけて、気をうしなってしまいました。美しい顔がみるみる青ざめ、歯をくいしばったまま、もう息もしていないようでした。
「伏姫、伏姫、しっかりして。」
義実と、おくがたの五十子は、伏姫にとりすがって、声をかぎりによびました。
伏姫は、死んだようになっていましたが、やがて息をふきかえし、うっすらと目をひらきました。
「このうえは、神さまのお力にすがるよりほかありません。伏姫を、洲崎の明神さまへ、おまいりにいかせたいと思います。」
五十子は、かたくけっしんしたように、義実にいいました。
「なに、洲崎明神。ふうん、しかたがない。いかせなさい。」
義実はしばらく考えて、さんせいしました。洲崎は、里見の領内ではないので、そこにいくとちゅうがしんぱいでした。しかし、もうそんなことを気にしてはいられません。
伏姫は侍女にだかれて、はじめて城の外にでました。おつきは年よりばかりにし、めだたないようにひめをとりまいて、はるばると洲崎の海べをさしていきました。むかし、役の行者という、えらいおぼうさんのいた岩屋に、七日のあいだ、おこもりするのです。
ひめがいなくなってから、城主とおくがたは、ごはんものどをとおらず、夜もねむれません。ぶじにかえりますように——それだけを、ふたりはいのりつづけました。
「伏姫さまのおかえり。おかえり。」
とおくから、この声がきこえてきたとき、義実と五十子は、むちゅうで、ひめをむかえに走りだしました。
伏姫は、侍女にだかれて、すやすやねむっていました。そのほおに、ぽうっと赤みがさして、じょうぶになったようです。
「これはりっぱな水晶のじゅず。いったい、どうしたのだ。」
伏姫のえりにかかったじゅずを見て、義実はふしぎそうに

たずねました。
「はい、これは、いただきましたものです。」
「いただいた？　こんなみごとなじゅずをくださったのは、どなたなのだ。」
「どなたかわかりませんが……。」
侍女は、こわごわ話しだしました。

岩屋に七日こもって、かえり道についたときのことです。姫の一行は、ひげのまっ白い老人にであいました。老人は伏姫にちかづいて、じっと見つめていましたが、
「かわいそうなお子じゃ。世にも美しくうまれながら、このひめは、口をきくことも、わらうこともできぬ。夜なきをして、だんだんやせほそる。それは、ある女の霊がたたっているからじゃ。よし、よし。たすけてやろう。このお子は、とうというまれつきだから、たいせつにそだてなさい。」
そういうと、老人はふところから、水晶のじゅずをとりだして、伏姫のえりにかけたというのです。
「わたしが、おれいをいおうとしましたら、もうおじいさんのすがたは、きえていたのでございます。」
「それはきっと、役の行者の化身にちがいない。」
侍女のものがたりをきいて、里見義実は、いよいよふしぎに思い、じゅずをしらべてみました。じゅずは、八つの大きな玉と、百個の小さな玉でできていて、その大きな玉には、字がかすかにうかんでいました。
そのとき、城主夫婦は、思わずよろこびの声をあげました。じゅずのふれあう音をきいて、伏姫がにっこりとわらっ

たのです。義実は、じゅずを手にして、ジャラジャラならしました。すると、伏姫はうれしがって、きゃっきゃっと、高わらいするではありませんか。

じゅずのおかげなのでしょう。そのばん、伏姫はすやすやとねむりました。

「ひめはたすかったぞ。このね顔の愛らしいことはどうだ。」

「これでわたしたちも、安心してねむれます。神さま、ありがとうございました。」

じゅずにまもられて、やすらかにねむるひめをみつめながら、夫婦はよろこびあいました。

義実が、ぱっとはねおきたのは、夜中の三時ごろだったでしょう。ふとんが重くなったのでおきあがってみると、血まみれの美しい女が、そこにぼうっとうかんでいました。

「おお、玉梓だな。さては、伏姫の夜なきも、おまえのせいだったとみえる。なんのうらみがあって、あらわれたのだ。」

義実は、玉梓の亡霊を、はったとにらみつけました。

「いかにも、わたしは玉梓。命をたすけるといいながら、どうして、わたしをころしたのか。」

「まだそんなことをいう。おまえは、ころされるような罪をおかしたではないか。」

「滝田の城は、わたしたちのものじゃ。城をかえせ。」

「とのさまをころして、おまえたちは城をうばい、民百姓をくるしめていたではないか。」

「これ、里見義実。おまえは結城合戦の残党、あわれな浪人者。この城の主人になる資格はない。さっさとでていくがいい。さもなければ、里見の家はほろびるのじゃ。」

「うぬっ、まだほざくかっ。」

義実は火のようにおこって、刀をとりあげようとしました。しかし、まっくらで、どこをさぐっても、刀がありません。玉梓はだんだんせまってきます。首のあたりから、血がぽとぽとおちて、ものすごい顔です。

「あなた、どうなさいました。たいへんうなされて‥‥。」

おくがたにおこされても、義実は、まだ玉梓のすがたが見えるように、にらみすえていました。

「玉梓のゆめで、うなされましたの。」

「そうだ。玉梓が、たたりをしていたのだ。伏姫にちかづけないもんだから、わたしのところへきたのだ。」

義実は、くるしそうに息をついていいました。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com